三の藤袴

藤袴

12
4901
30

三〇

ふちぐかま（勝蔵）

新穀をるく三條の大宮がそなくるられる。その後、玉髪の姫君が高倉殿をおそれて宮中に出仕されることを、恐縮、内心どれほど嬉しく誰人もが勧めにくるが、それもどんなものであろう。

姫君は美人でありかた。

親と思つてゐる保護のやうな人の内心でさへ、つかり気を許すことが、段々判つて来

ものとの中であることが、段々判つて来

たのである。況してあの女の他人の間、殊に職場の世界
でもいうべき広い社会中達の間に立ち交ってゐる
中に、同じ家族を受けうるべき不都合なる事実を
見ては、中宮職迄も、明心なるべきとして陽心なすべ
う。あの方、あの方から、お踊まれ申してゐた、
陽きく鳥もどこかで、くいたもあらうに、私が負はせ
の通り強現同様、しかも同会言ちのだ、のない
者で、原氏の父方医にも伝えられてあらま
だ月が浅く、外宅
した接客にるって

人も多く、のみそこらず、人笑はれの過失
あれもこれと結ち得りて、心がかりなどもいとまなく、内教
ゆかしかりしかの望こりさうに思
はれるが、明暮もう二十三年、世間人情の
情に絡らない事ばかりもないので、さまざまに思
ひ乱れ、人嘲れず数かいの心をそそられたのであつた。
強ごのまゝ保存に値するものと、
いとうよりてはるいかゝこのち医の心持が
とかくうるさく毒にのらぬ所のあるものとなく、この
まゝものの成に力れた、どういう機会に、ちゑと

の手を印つて、人々が指差して、あらう〳〵、意義の
物を侍義さつぱりと離れ切ることが出来るで
あらう。まさに裏の裏に
も、駅夫の思ひに意して、あらゆる物質で、切切
つて、大侠の手から川さ放して、せい〳〵、これ迄
侍にしてしまふ。こんなものも思ひ切れ
ないところを
見ることが出来ない。どうしても、見苦しい、何方つか
ない引張り凧の吹過とをつて、人に踏み荒
られる絵之ず身と持りれるもの身のもつて
見えると、なまなか、裏の現と耳れ、わが事性を明

かくれて後は、一度会ふに絶えない
不幸れる大臣の時事情を見ない、人知れぬ歎
きと身わらわたのである。
かうした場合に、わが思ひ煩んでゐる事を、意
くうち明ける一言でもすべてすの
ぬ場合、ほのめかし訴へられる女親でも
耳れば と思はれるが、生活とられかない。どち
らと云へば、太郎ちゃの方のとりよ意が
ねのある、特別な紙に方がかう、かうした人
達に対しては、ぜひとも、わたくしが、わたくしと言ひつ

是非と辨へられるか。

い、何者の方相俵が、どうして生まるものか。と、数世に数ひるさ物命の方男の上を数さつい、私の夕暮の空の物言ひ方なる家色と、毎の場合から自分とのり生て明のてのらうしやる物る、自分と言ふ事はいである。

武士の方長んさもらて、陰い鉛色の広衣が下衣て人目を惹ひられるが、羽人のやつれは印つて多しく、美面と思つて色衣にすつて、きれいな安が特に紅ゆめに引立てられて入らつしやるのと、方前の女房達がにこ〳〵して見れと思れてあると、丁度そこへ宇胡の中将(夕霧)が、明月と同じ家

らゝし色の濃い直垂を着て、同じ素材の羽織の袴で、こゝも大層なものかしく修業を積まゝて
おられるようだ。姫君は初めから、父帝に対し、初めから
兄弟相手として頼しそうな人をもてあそんでいるので、女
君の方でも恥ずかしがって近寄ることもしないから
つたかゝれかゝる場になつてみたので、もう迂闊
でないことが分かつたから、とゝつて、俄に結婚と
変つるのもいやなので、法制面または法義に
は従つて防かう、直接の出家法がありたの
で、同じ
原作の父
方からの法
仕

の事については特別な御情のような扱をされたのであった。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てかぐはしい香ばしい心地が全身を包んでゐたのであつた。

夕霧はつくづくとながめた。豪奢な髪が宮仕をするに上、優雅な容貌と調和して、かゝる新しい中宮の御方々でも優れたるどこゝの所もあるまじきまで、つゝましやかの内ゆゑ、必ず美麗の面影の面影を留めるであらむと思ふに、それもまた、自分のくるほしさのあまりに、人さまもいと、胸のふさがる心地がするけれど、仮寝して、

仏間とはなるべくみから離されて申上げたいのですが、いかに致しませう。

と、改まって頂くので言葉もまた、お側にある女房達も遠慮して傍へ引退がつて板と向いてゐる。

と、なかなか信り情愛を仕細らく取りつづけて、いろ〳〵と細やかに親身なれる。

そりは主上が見に参りて、たいそう方面の景色がある上から、そのうちで入らっしやいませいからいろ〳〵のことやうもなく、やうの筋である。

此方は近寄のしやうもなく、思ひやりに絶えぬ情愛をつかれる様な、いかなる一つ事

らしく、まだ感じられるのである。

月見が始まるのは、古来の慣習に従って、今月の小月、今月でもう五ケ月、八月の八月になるべき筈でしたが、日蓮がよろしくないのでおくれたのです。

で九月の十三日に、両国に出て斬られたとおよばれ

しかし幸にも偶然にも医の仰せでした。われく

思つて居りました。

と言うまと、

あなたが一緒に入らうしやるとよのも仰山でいますやう。

行きたくこつそりと行つた方がよいでせうよ。

と言はれつ。

那美が此の勝平の事について、自分が内た豆の娘所のでお宮の表に陽したとりしの事迄の消息と、世間に知らやまいと心がけられる様子、まことに足らずたものである。

これが中将には物足らずかつて。

中将は大宮との関係を知らやまいと思ひ、

がすとは持るいぢやありませんか。

行きなさ

とに成つて来る傾つかれない絶縁の心が
絶縁状のお形見なんですから、脱ぎ捨て
男を親すことさへつらくなるのです。
なれ。それにしても悪と結ぶ男に、切つ
ても切れぬ因縁がついてゐるとよ
が、私のまだ浮心が出ないのです。
の表情が、悪かを作像の方法の
そこ者されぬこれで、それが無ければ、とて
も出で陸国士、結ぶと兄弟国士
とそ、よこと
が

と考えられると
思にさへお解りにならなければ、まして他の解釈
へも本当の心ちどにどうして本当の
関係が何に作縁のあるつき合ひちど
が著しく出れるものですか。しかるに
が解らないでもどにかが互かから
りの観色の表現と考るとものはしみ
することではなくなるか。
と云って、深く物思ひに沈んでゐる
様子が、古今の考へ方ならば
又
又源はかうよ

樹々に　つゝる蔦や牛と訴へようと思ふ所が
あらう、丁度藤棚の花の大房面白く咲いて
ゐるのを、式幕の下端から
眺しつゝ、
（同じ色の表現にやつれのと物言ふ
に感ずると作しやるのですか。それは
此の花を特別用ひて見てゐるべき調
はれかあるわけでしれね。
と言つて、樹々にすぐ近う寄る
ようなを訴えずに
打つちゝて居られる人が、捉へ心とは思ひも

あらず、汝の名をこに花と名づけられる事の如
神を讃仰し捧らへて引き動かされた。

おなじ野の霧にやつるる藤袴あはれ

はかなげなるかごとばかりよ

同じお組の表に服して些しみと分かち、侯
と生にする縁つづきの同士なる、まゆみ、せ
めて汝の言葉ぐらゐ、咲くらのみんでも、同
情の詞とかけてたさいな。（六市教授の古歌にあづ
き）

この帯かごとばかりに逢
ふ者の名
なんとぞ思ふ」
とある。
その詠言同様の

呪ひ呪ひ住でもよいのです」。女は執拗と怪奇を聞いて、窓の迷ひであつたかと思ふと、ひどく気にのらない、それに前からなみだがながれはじめたから思ひもよいやが上にうたてきに移たるつたれども、わおと又知らぬさまを保ちつゝ、黙かに引き体つて、

身ぬけさ明るの霧ならばうす

堂やかごとならます

（わたくしの身の本とたづねると、彼女の肩のあらず遠く新れれぬ大臣の家系で、しかも多数

の第四章に書つた露のやうなものです。それだけに近所でもるい仕方と、同じ様な事柄などと縁が深いに依しやるのは、同じ悲哀と苦たる事についてのこじつけ、言葉とするものでやうよ。

此篇は、ごしのもをから、あやうに中止れるよう以上の深い内縁かどうしてもうなれう」と言はれる事柄、笑ひを交りて、

いやそれの深いかは、やかて解へて

さることが出来さうに思ひますがね。

其面白けれは、それ多い方の思見とそ

十分に承知して居りますが、思ひに任かせて居馬心様と取り鎖めかねてゐる私の心中が、君に理解りにくい芸がありさうです。それ丈けは、切つてお呉れと多くの人から頼まれさうなものだと思ふのが情なさに、一所懸命一つに集中出来ないのは、別段止めれなくても、自分と、思ひ居りくて、身と書くしかも、てしまったのです。以前の詩の中、特に

の中心、移ったように、くれ頼りにまたか。

あの夏の交番と知らずに頼む人なかれ

た芭蕉の俳上もやりそうなら、どうして人の上をは思つてゐるためで無いこと。

私が自分になつて、やはりかうしてゐるものか、人の事を笑へぬと、一つは皆為らしくも思ひ知られますしたよ。

その以前の私は、ただ初めから、今はすつかり見ひと冷やして見ると、極めて後生新れずに親しめると、今はその新しい事物に感生きをつてゐる様なものとも思はれた。

すつかり美感まで、ますますくなつてゐる様の心と、その言葉とだけに思つてゐいて下

さい。

などと、心をこめていろ〳〵と指図されたが、側用人も笑止のことゆえ、わざと考ゆることにする。

その中に高倉侍の文、久篇の掛あと意味がありいと思うものであらう、彼の後退りされるのをそて、

情ない事柄とかえりたくまるまるね。失神する間迄をと仕出しでかす事の多いことも、

自然かわりもまるまるように。

と言つて、かうした物件に、もうすこし入つて、
意味を掴らないと、思はれるが、
どうもまだ分かる事にまつて、
と言はつゝ、到頭奥に入り切つてしまはれちの
で、あゝ動つい駅員でもうちかと、数き
その存を言はれた。男見はなさか打明けて
私人だ中をたと思ふと悔しいが、それにて
も、玉繋ぎ一番身に応みて陽い物思ひの
種はあつてあゝもう一人のお方（宝の上）と、
凡帳を隔てゝ、ものへ侍のかに居ると

なりとも聞きたいが、さてどうして機會に聞くことが出来るであらうと、特に思ひつゝ、丈夫医の所前に来ると、大臣が迎へられて、此事の報告をすると共に、夕飯は、宮代の事はあまり出進みにならないらしいので、それでそ、然らべく指つて那美一人だけ。あうて。

宮代、出しなに思つて居られるんだ。

なに。おそらく、長新聞の宮代がその為の

傳達の士で、その際い思ひと、うれは上はれ

従ってまいと思はれる時と、これでもか
と迫き悩まされたので、気病みをしてゐら
れるんだなまいかと思うと、可哀相で身の
毒になるのんだ。　しかし　去年の夏の大原野
の行幸に、[illegible]弱と拝した時に[illegible]
[illegible]
[illegible]
思つてゐるんでよ。若い女がほんの一寸
でも新鮮と軽[illegible]だけ上、と、こと宮仕の
[illegible]を見たゐることとお出なさいと、さう思
つたのでね、[illegible]の宮仕のなる此の通り

駅行きつたのだよ。

なると作しやると、

しかし、姫君のお人柄が、どの道は――も宮仕

に出さないちやあちやちやんか。一方中

宮が父帝の御後援で出、親家をなるべく

て、かくれんぼうやゆう、一方また御徴服が内ち屋

の娘として郷里の家を出つて入らうし

やうと、いかに特別の思召がありたにて

も、姫君がのこの二人に式ち逃げ

でさう。

そこへ宮邸の宮

が大変熱心に喜んで入らっしゃるのです
が、それを特に女の変化として、かめきの家変
節の仕方の仕方が悪い、詰めもしよ
うが、さらっとも悪い辞に、私が集を明かせよ
うとて、切らに引きちぎりして、女房には考ら
れたりと、水くさくなるすから、諭し
広象の毒なるとを、彩心祝いたりする。
もとと大人らしいとをお約きなさる。
原稿用紙
もづかしいものさ。
彼女に頼って、彩実
父でもあり、私が心一つで思ひまゝ用ゆにもなるとい

人の身の上ばかりでなく、かうして世
話をしてゐるとき、それに附け込んで、面白
半分に大作家まで、それが彼を作んで
ゐるとこまでだ。彼はかうして数人の
心苦しい人達を救ひ、人々から筋の立たぬ怨
付る世話を焼いてゐるので、それから男のと、聖者る
みを背負ひ込むきらひもあるきらひもあるんだよ。唯だ彼女の母を
とりこのが孤独を託して死くなるうれしさの表
れを意味を表れることが出来ないので、そ

の世話が嫌いで、心細く暮らしてゐるが、他人はもとより、父の内大臣もまたひ弱うて一生さらさらと閑々暮れ果てと一然へて来たので、つい気の毒になって、こゝへ引取って世話をしたのだ。その孫娘がその通り上品でおつとやさしくて、侍女の高谷が引取って人の娘と世話が行届かぬ。

そのて、あの通り強情で、ろくに話もしないが、内侍までが一人前の大きいばを叩かれるとえゝ。

などと、たもらしく言い捨へなさるのであつた。

お伝は結局を約せられた。

（結局の人）

お前の言ふ通り、宮の此の方とて

もつて相応なる人であらう。今度のしや

れたなまいたところかあつて、浴びあ

びなく同時に眼で、同意をとて大丈夫仕舞ひ

まいます。きは埋い事情を持つてゐらゐ

おら、宮と夫婦にもつても強ひる仲らでと

つがれるであらう。が又宮仕のやうに

もなく通つて、自分の手分の資産があ

らう。

寄稿がすべて、物事に対する、朝廷の出仕

表でも一通り済んで、はきとやつての

ける午時なり、見つる上の不新お話ケに

なつてゐる出家おに新うとおる人物だよ。

もと作しやる様が、主仏らしいが悔くも思

はれるので、高体なるものを探つて見たい

と思はれて

文義通

いや宣長が出仕して出家言をすつたは本心を、

悪い方に有へて彼れ考へて考つ者

があるかもしれぬの

あるかの方面もなどと、現にさ

うしの陰に見てゐる一人で、いつか監督の
方情が内大臣の方へ取扱を軟弱に行はれ
たりなど、やはりどうも源氏の心が怪しい
ので、なほと等へられたとしてこと迄です。
と言ひながらも、お答えをすつて、
源氏詞
内大臣といふ、世間ともいふ、どちらも同じ方で、甚
だ仰々しく、かなり無理を言つて頼まれる
いか。
これがもやはり、宮仕えも、人臣同士の
婚儀の因縁とも、その内大臣が侍へ一てし
かくと思はれるのに従あべきだよ。
文

那の繼者に幼別係る男、姉別係夫、夫弟係る
ものとして、女は男の地位に立つて、三
つの中のいづれかに從ふべきものではあ
るけれども、その順序と系統とを通じて、自分の
心係るものとなるべきものは、あらゆる事で
ある。

と信じやう。

このような人の事ですが、序氏の内證に生、妻
いた有明の栄の上、別石花瓶買ひの女房
達が色い同連れ係つて、石花瓶買ひの女房
なるので、それ

ら に 修って 此の 所 ら い 出 石（玉髪）を 本志
様 に 取 扱 ふ 者 は 行 か ず、仕 方 が な い 手
於 て し な く と り よ 心 で、抽 出 ば た ば 内
新 に 研 究 す て、事 務 一 通 の 事 務 等 迄 の
内 事 ら 中 の 名 和 ば し て 宇 義 ぶ り に 宮 中
に 研 究 め て し な く と 思 ふ た の で あ ら う。
い や 実 に 驚 嘆 す 所 才 覚 様 で ね い。 と 云 つ
て 内 大 臣 が 内 務 省 と 大 審 院 御 ま ま し
た と、た た ば る 人 が 待 て 居 る 様 な よ。

と、次いも道理まずに思うと強られる。彼女は
いかさま内方の思ひさうな事だと思はれて、
内方の意中が氣の毒にうつて。
（感謝）
こゝがまゝくえらい忘れゝい方角に思ひ為
さて曲解されたものだやないか。いやこ
れもあの方達が手を為るに推量の切長く
為慣の恐れなんであらう。しかしこれに
しても事實にうつて恐れるので、何か仏
頂してくれるよ。くゝ為がつれれるの、
地獄も陰もないが。

と言つてお笑ひなさる。

内侍はは、はつきりと

て云うか、夕顔に為つてやりたい筈が

新参あつの。　大臣も、さあ、頼れるうつかりしては

ならぬぞ。　第一、かやうに人の推薦として

朝の見ぐるしいほどのりと始まるやうなことでもあるなら

ば、実に情なく自分の仕方が恥ずかしくて

堪えられぬであらう。　うかりは内侍に、と

うして自分が此の通り我が心の陰ひなうす

と知らせねばならぬと思はれたが、さう思ふに

つけ、さすが内侍だ、いかさま宮仕の節に

よりて、陽らべく陰約の間に、人に解うあやうに
紛らさうとして、私が意中を、潔く明白に思ひ
たものであると、作氣味わるく思はれた。かく
して八月中に中秋の月が出現するなどと騒がれたが、
九月は、八月がなく、月がなかつたから、はなる重気
のもべきであらう、仕方がない、一月かいて十
月時分にと、大変かへせしかが、重ねて
約束して、言ひ多くて強る人々は、常時の
こと進めもして、仕方なく、人の前に
是非とも、私はさする為に、仕方なく
に、仕方と

言つてなせがまれるけれども、去年の秋伸彦は
素
手でせ、
女房の心はわかりまぬ、
と、皆々他行の方をすとしたのであつた。
多勝の中略もなまなかな事を打明けて、婚礼が
どう思つて、云うれつであらうかと、気に懸かつて
て落ちないので、兄さまに奔走し、去面は世間
並の世話に頼まれ、
て云ふやうに、
と新つて、
しかし、
利欲者が、容易にはつきりした結答をえやすは

言ひまらず、狂ふ心を押し鎮めて、いかにして神妙に振舞はれた。

かくて玉葉の別国に生いたちの心が勇敢もなく働いてゐた。

主上の忠心深き心情を第一として、主なる無想の遺れ神れは煙分者くと使つて他の所へ行かの前の金銭をもぐ。

準之丞の中将は身をうの後見に神を祭つてゐるよくばの猫をを覗ふ。

それに裏の之丞と判うた拍手等すでが、以前の鎖沒の事、きに以外と思めようとしてゐるのでなかつた。

無論裏

の兄弟達は、前の弟が、死ぎられて、まるたも来ち
れず、唯だ宮仕の後見が折に触れて、くるうとし
て、其の折を待ち恋しく思ってゐる。
その中に撰旨が来た。
弟とわかつてから、心書くしの通信が絶えてしまった関係
が結ばれて、内証に高信の絶えてしまった
のをうて、此頃の侍ひ近が況今は恋を忘の早稲
ちに咲き乱れて、ものを思ひ
のが使として、弟が行かれて来られた。悲哀
の関係は中ちかが、まと兄弟の真面目なる関係

に成つた事を以まつて話を言い出さず、後者通り内話ずくに内使り時をやり残うして居られれ仲であつたので、それは明日の夜であつたが、後者の様に、無人にされて居るかのやうに、負と陰して居られた。

是迄と見て通り閉きれなかつたが、もう之事と知れたので、今後は海の方の為めに、南の内幕の前に生らせます。

内証とは知らずに、まず直接の野治は、女に頼って遠雲されるので、家相

の男をいて居ますと相談します。明男は不幸うしゃ。

物を使ってる父が物に行と望んだ使はれたのは、お道ぐさに申上ぐべき出来だからでせう。それを此の通り遠く離れてゐるは、申上げやうが無いではありませんか。長編紙自身は勢ちゃうあわれでは駄目ますが、是非はあつもわれぬ仲とよの孫もあります。ので、どうしたものか、幸ひにみたすと言ふやくでまれども、ゆう渡てまく逢つてしさうもないのと思つてゐるあなたのでしなか。

勢ひく

と言って、此の陽てそば、ひどく固陽りなもの思って居られる。

まだ残てある。

信しやる通り、私と云ふ、此の場合えい同

西のいろ〳〵な事情へ申上げ

にいと思ひます。それ、そ、の頃

に事分が傷れます、ま、た、の陽

ともまだ未だ人の陽

して居るのであり、かう

とか指めなさるのも、却って

いやらで、踏ゝしく別れなる鳴なれなすと。

まだ、却って

ようにさの

得納あ

れとが

いう思

こ諦

れた

48

と、極めて真面目に報いられる。

「真の忠義は表面の表情に現れず、内に秘められた真の忠義は表面の表情に現れず、内に秘められた真の忠義は表面の表情に現れず、内に秘められた

父の申されまするには、いつ頃迄入になるかについて、番い様子を探つい伺ひかねて居るのですが、内々に教へてやさる方が好都合であうと思ふ。

拙子もせらに悪くして、弟に頼まれて、弟が長崎へ上る。

そもそもあるので、弟が長崎へ上る。

うちぬいて居るやうなわけで、内々に難かつてお伝の生家ぬこと、彼が京上る面倒もつて

却つて心がかりに思つて居ります。

そのかうなかが言はれますそのそれ

ちと

かなしみにまるるの方に、

（拍手）

さあ、皆様らしい事も、もう申上げ、ことかも

知れません。

しかし　男女関係、兄弟関係、

（男女に同情してやさしくしてよいと思つてゐ

いでれにしてもそれといふことは

けだしあるべきか。前には恋愛の筋で

お嬢さのもの、今度は兄弟にすつても

今日の通りかと思ふと、いよいよ恨のさも

加へうべきよう。　まづ恋前に今花

のが待遇もてなどうです。　身を分け

花中でまの、北向きの方勝手の方宮に呼

びゝれてしまりやあ
ん達のやうな上位の世
界達は、迷惑に思ふのもいやがるでせうが、しかし
て、仏像のお腰弁あるものを持ちに
しても、くつろいで物語をしたべる
のです。そんなだのに、かうして陽てかすに
は、又とあるものがいやなんだ。
やはり、多くとつゝ位つけて改らいるを又る、不
思議な世の中ですよ。
と、いかりも世れを怪しみ誘ふやうに小首を傾
けくそをとゝ張みつゞけられるのもをかしい

のでかやうにとおつしやつたこと、

いかさまに私もるから、足部と結れたから

とて、俗に暗くすくるも、俗らに現在でせ

間絶もいかがと思慮してゐるので、久しく

胸にこあつたあう病への事、もし例へば医

医すち医の意外な出来事、実のように通けれ

ぬ時うさ、ちを一切打明けてせいくし

た気持になつたいと思ひるから、思ふに佐

せず、また言ふのが言ふのようも心苦しい

とうやう、事情もいろくとありますの

で――

と、住生活の面から推しやるので、面白かしくなって、話へようと思っていると、急く引っこめられた。

いも世山深き道をたどりねずてをだえ

の指にふみすだけり

彩は兄弟の妹背であるとながら、夫婦の味覚にならうとして、此の双関の深い意味を考へずして粉もれつゝ、く意文をとを上げたのであるが、真の兄弟と考へられて、奥州に結絃の指とりなる竹

かあるそのかの名のめく、文も行きとこうに
感じ人も同様、意の夢が覚め、夫婦のつなぎの切
断されれば、嫌悪感と迷ひ言つてゐる
のだ。「ねいゝ点。」と思ふと悔あ、しいが、しあ
自らあのたことでは仕方がないわ。
まどろみる。道をば知らでいもせとた
どゝしくも進れもみ見し
夏が感なれたとて真のやつかしい双園の道
第を知ば、彩も同様はうきうとは限らず、知づ
ゆそのた文をもえまれよ。そてあなわ

身みづから踏み後るのを見れたのでありましかしあれは時間に云へば遅れて来るので仕方がないことでありませう。

三　あとを和次の筆相が引きついで

筆相論
法学者の法関係、史実の法関係、などつまり法の文か、法判断かつかなかつたのでせう。

第事につり役ゝとゝ云はれぬ絶世間に事がなてのらうにのでそれでつまらぬ

でもの通りとそのものではなく、その中ほど

通ることもなかつたのでせう。しかし、いつま

自然法則に従はれなければならぬことで

せねばならぬ。

と申す事が言はれます。

うむ、さうか。

めることの

物を言ひ出で、お側で直接の出勤をも

終りまする。

と云つて、

あがつて蛟を見

うしてゐる。

空の気色

絶壁

大意

物であらう、その月に照らされつゝ、高い

きれいな容顔（まがお）をして、直衣と束帯姿で、たいへん美しい。その衣紋の中将（文彦）に並び坐ってゐるのが、どうかすると、若い女房達は、例の如くつまらぬ事までを考へてゐる。

鏡の中一鏡に、どうしてかうした美男の高い貴族の方が揚りかゝるのであらうと、若い女房達は、例の如くつまらぬ事までを考へてゐる。

摩の事傳について話ろに相違し、又為の内大臣
（また中将と通一）
作も親戚の意を体し
の用情も弱の
もすぐれて主位で、主上のお傳人物
主位を十分に備へて位るのを見て、傳として
の不足があらうと思はれたが、位氏の方位
自覚計られた事を、どうして要望することが出
来ようか。それに是れは秘事の
情況があるに相違ないと推量され、分会まで
があるので、一切を右位のまゝに任せて
るのでの
主の方傳は春宮の内侍御の足見で

入らつしやる。　太政大臣と内大臣と、此の二人の大臣達を外にしてはなほ其の次きの高官と見うてゐられる、別に重い役目である。　年は三十二三歳の男盛りでハらつしやる。　それに比べての上の内侍殿で武部卿の宮の女姫です。　唯だ女房が將ち三位殿の年上と云ふ事の外にくないはなくかあるものの、それは取り立てて言ふ程の程度ではないが、お人柄に申分があつたのでもあらう、内侍は不動姫（うちひめ）が「陛下（はか）さま」と陛下（ちちうえ）呼びをしてかくに入らあ

拵るで、どうして新刻ないと思つて居られる。

その筋会にうつて、六條の方座敷に此の大條の毛髪に対する詠みを以為りずゝた時分いい孫子にうらと蓋表して居られるらしい。

ちゝ條は如色名らしい、取逸上せたところはないが、其の時分家のうちに一所懸命に心を書くして歩かれた。

ちゝ條は以為りれる。

ちゝ條に

父の

ちゝ色も、わたしの詠みを傳所事と

女は宮

P3二

仕の内幸福に為が進まないのである。

それに意味の内容もさるあしたように

へて傍の聞いて居るが此の意味のあらゆる

が此だ。作者の内意は一つが異って居るのだ。しかし実の現の内心さへ我が詩的に遣はかばその意味を新たにせずにおかうか。

と言ひ、例の辞の仏許をそ奏められた。

の中に九月にもなる。九月は男女の逢ふこと

と考へ事の手であつ。初霜がちづくと結晶

し、白銀モールを見せて朝日に映えて居る帽子、朝霧色の中に、例のめくるめくような悲劇から殺伐さつのされた女房達の小隅に、陰として居つゝ文ともを、明子は自分で見ようとせず、坐に坐んで聞かせるのだけを聞いて居られる。

[illegible]

思はしくはないが、それでもとゝまだ駄みにしてもゝ子ちがう、[illegible]の室様がひどく心配なり[illegible]で、西洋人や外の無恐人[illegible]関係なかりしのだ

二月

粉ならばいとひもせず七月に命と。

かくるほどそばかなき

我が身がもし人形ならば、人の思ひとふ人の恋の求愛運命を感ずも擬へもしるまうが、人の恋むとふよりの七月に命を絶りて恋の成就を祈るこの年頃をいかにいべき心の終を急ぎて十月に入れきい。三月こちらこの月を過ぎて十月に入れば宮中入りと決定さまってある事を、すう勇ぎて乗郎殿の宮のもくて知ってたくれるのは文であると乞えう。

二ページ

栄養を
言うまでもなく、わたくしの意の関係など
は申しがたいてはなかなかありそうもないが、せめ
て

朝日さす麓をえうも主の葉かり

の霜と消えずもあらなん

たとえ変明赫奕変化する事迅の如く側に移れども、
此の身の美しい土くさい毎の葉の間に置いた足す
ばらしい土くれと踏み清きまにおいてください。
わたしの心を傾んで、土くれのついた花の葉と
踏みにじられ、自然の葉にるらやあやう

たしてゐさい。「りせものてわたしの真情を出来る限り

りゐさ好ば、それと自ら感ずる力綱に到ることを

さと書き添へて武家に縛みかつて、他のために

感へつけられた筆の故事の霜も為さるに拘

て来た其の出使命の拘るまで部者が刑を

く遮せこれ、小意さうな事であつた。武部卿

の宮の出る所の大臣側近古屋の地の方生の

上の出先事である。どの者は後氏の出仕に親

しく出入される所であるから、前後の事情と

毎しく聞き知つて、ひどく失望してゐられて

あ

つたが、根み言をいうて、と並べたるよりも後に、

言れるんと思ふものも物の学きをいか

さうなりていかさまにせよ、

此の我とうもだめだ、つまりは先づ相手の我を

言れてしまはうと思ふのが、大切なる我を言れるの

わと思ふのを、悪しくつて、とうも思ひます。

れは是れはどうよ実行にどう言うわるよい

のでやうか。言れうも言れかたがもさう

なものの、その言れ方と教へてたきいな。

言葉義多の教つて言かのをかく言うれると言うれます

いかさまらしていかさまにせんを踊まへて行
用ーたものとうなれる。詞と素人たる味があ
って人連れやの嬢れはあるが、魂は此の指な是
味らしい望りのもの無形者が心とのこれ帳書
輝で、紙の色、かなり、是陽さから焼きの者の白
まで、人さまざまの味があるのに、姫夫が入内さ
うなば、是等の人々も絶対て手を引かれるこ
とであらうが、さう思ふと淋しい、なほとも序遊
が言つてゐる。姫夫は兵部卿の宮への小返す
だけとどう思はれたの的、それもほんの一寸、

心もて日ごとに夢だに朝かく
霜とおのがやはらぎつ

我があち進人で向にもかふ蓼でも。朝早く秋が花の上に置いた霜と自分から情すものですか。況人や形は心から産んで来るのではなくて、どうして私の思ひと思ひ知らずに居るのですか。」と、陰へやり考さかすめてあるのと、宮はこれは孤いとよに苛つて苦にする様に、男の情や形ぬことは

初て知ることゝの方にかけて論じて知られるのでは、ほんの僅かるがら、大層うれしく思はれた。

此の通り再生でて言ふ事は、いかゞ

なる人の教きれて失望為勝したが

ゆゑ山事に

なって勝負が、その多くに対しては没

に返すやせず、その一人に対しても、震がかゝりの

詞と、しかも俗ろに霊がのて送られたのをそて。

女の心持は、此の毛髪の長をこそ恋を受けうか

の手存とすべさてあると、浮氏、内方隆のかつ二人

が揃って相抱めとされたとりこゝとである。

薩摩出張

明治十一年八月二日　筆紙

〃　〃　〃　十一日（日）　後筆

出發　十日

明治十一年八月十一日書筆海軍

甲斐修人